

宗教の社会貢献活動についての 運動論的視座

寺沢重法

本発表では、宗教の社会貢献活動研究において、(一)今後、一定の指標に基づいた比較研究(宗教間、地域間など)のためのデータベース構築が必要であることを述べる。次に、(二)そのためのデータベース作成にあたっては、近年の社会運動研究で用いられる「イベント分析」の手法の応用が有用であるという筆者の認識に基づき、「イベント分析」の概要やそのメリット、並びに研究例を提示する。そして(三)データソースやサンプリング方法について触れた後、(四)データ化作業のためのコーディングマニュアルの暫定案を提示する。本発表は宗教の社会貢献活動のデータベース化作業の序論的中間報告として、その方法を提示するものである。

(一)近年の「宗教の社会貢献活動研究」においては、厚重的なケーススタディが蓄積されている。しかしながら、これらは少数事例の研究である。さらに、社会貢献活動研究を行なう研究者の研究対象やディシプリンも多様である。そのため、個別宗教や個別研究領域の枠を超えた「比較研究」はまだ確立されていない。今後「比較研究」を進めるためには、明確な指標、限定された分析単位、時系列・地域間比較の三点を満たすようなデータベースを構築する作業が不可欠となる。

(二)データベース化にあたっては、近年の社会運動研究で用いられる「イベント分析」の手法の応用が有用である。「イベント分析」とは、抗議集会、デモなどといった運動体の活動(「イベント」)を量的に把握し、計量的な分析をする研究の総称である。イベントが起きた日時、場所、行為形態(戦術)、などの情報を、新聞記事などから一定の基準に基づき抽出し、これらの情報を一つのイベントごとに一枚のシートにコードする。このように情報を数値に置き換えることによって、数量的なデータセットであるイベントデータを完成させ、このイベントデータを用いて、社会全体における社会運動の特性を明らかにする。「イベント分析」のメリットとしては、第一に、抗議イベントにかんするデータの質的・量的な変遷を把握することが可能であり、第二に、社会運動論をめぐる曖昧な議論に対して、不明確で印象論的な議論を排することが可能であり、第三に抗議イベントの変数と他の変数との関連を統計的に分析することが可能であるという点が挙げられる。

(三)データソースには宗教情報リサーチセンターの宗教記事データベースを用いる。宗教の社会貢献活動に関する約二〇年分の記事を抽出する。媒体は、「全国紙(北海道版)」と「地方紙(北海道版)」である。社会貢献活動に関する分類コードから抽出したものと、活動領域・形態に関するキーワード検索から得られた記事を照合させ、重複箇所を除いたものを用いる。

(四)以上のような、データソースからのサンプリングを行った上で、実際のコーディング作業を進める。宗教の社会貢献

活動の分析単位は「宗教団体、もしくは宗教者個人が、組織的かどうかにかかわらず、主に非宗教者を対象に行う、宗教を直接目的としない社会的活動（平和、福祉、環境、医療など）に関する行動」に限定する。そして、入力は以下の三項目に大別して行う。第一に活動形態項目である。ここでは、ID、報道媒体の区別、活動の日付、活動が行われる地域名、活動の開催場所、行為形態、活動領域、参加者（団体）数をコードする。第二に宗教団体・宗教者項目である。ここでは、宗教分類、宗教団体（宗教者）属性項目、宗教団体（宗教者）名、活動への関与度合い、活動を行う理由をコードする。第三に、関係者項目である。ここでは組織名（個人名）、参加者・社会的カテゴリー属性をコードする。

養護教諭と子供達との人間関係

—— M・ブーバーを手がかりに ——

河 西 多 津 子

近年子どもたちや子どもたちを取り巻く社会の変化により、子どもたちの保健室利用の目的が単なる疾病に対する応急処置から、精神的な援助を求める子どもたちの増加へとその重心が移ってきている。その結果、保健室は身体に対する問題の解決や援助ばかりでなく、いじめや不登校、家庭内の問題等精神的な問題を抱えている子どもたちを、早期に発見し援助すること

ができる場として社会的にもその存在の重要性が認識されるようになって来た。子どもたちの心身に対する援助の質を高めるための基礎となるのは、養護教諭と子どもたちとの間の良好な人間関係である。本発表は、養護教諭と子どもたちとの間の良好な人間関係形成の基礎にあるものについて『我と汝』から現場が学ぶことができる点を何点かあげてを目的とした。

養護教諭と子どもたちとの良好な人間関係とは、双方の信頼関係に他ならない。子どもたちが、教師を「人間として信頼できる」と感じる時というのは、教師と子どもたちとの間にブーバーのいう「われわれ—なんじ」の関係があつた時であろう。また、その関係を重ねていくことで教師に対する信頼が増していくと考えられる。

しかし、「われわれ—なんじ」の関係はその時が過ぎてしまえば「なんじ」は「それ」とならなければならない。そのことをブーバーは「われわれの運命の高貴な悲しみ」であると述べている。過去となることは必然でそうなることの必要性もあるということがある。また、集団の秩序を保つためには「われわれ—それ」の関係もなくてはならないものである。

ブーバーは、人間と人間の間「われわれ—なんじ」の関係について「包括」という言葉をキーワードにして、真の教育者の生徒に対する関係の中での「われわれ—なんじ」は、完全なものとならないことよって存続しているといっている。このことからわかることは、河村茂雄が学級崩壊を起こしやすい教師として分類する「友達の教師」は教師としては否定されねばならないということである。